

第 39 回 伊藤大幸さん (中部大学)

日本心理学会若手の会コラムリレーでは、若手のみなさまに、ご活躍されている領域や普段の生活についてご紹介いただきます。

第 39 回目は、伊藤大幸さん (中部大学) にご執筆いただきました。

「根無し草」として思うこと

私は学部から大学院を通して、4 人の指導教員にお世話になりました。奇跡的と言えるぐらいの確率で指導教員の異動が相次いだためです。学部 3 年次の先生は認知心理学、卒業論文の先生は心理統計学、修士論文の先生は教育心理学、博士論文の先生は発達心理学を、それぞれ専門としていました。私自身は、学部 3 年次に始めた「ユーモアの生起メカニズム」に関する認知心理学的研究を博士論文まで続けたので、卒業論文以降、自分の研究内容に関して指導教員から直接指導を受ける機会は少なかったのですが、授業や共同研究を通して、それぞれの先生から、研究に対する姿勢、方法論、哲学について影響を受けた部分は多くあります。父親の背中を見て育つ、みたいな感覚です。そして、先月まで特任助教として 7 年間勤めた前職場の浜松医科大学では、もともとの専門とは異なる「子どものメンタルヘルス」や「発達障害のアセスメント」に関する研究プロジェクトで、主に研究デザインの策定やデータ解析の業務を担当しました。臨床発達心理学を専門とする前職場の上司が自分の 5 人目の指導教員と言えるかもしれません。

こうした特異的な経緯により、認知、生理、統計、社会、発達、教育、臨床と、多様な心理学領域の研究に関わることになりました。そんな私を「オールマイティ」と持ち上げてくれる人もいますが、内心、「根無し草」と思っている人も多いことでしょう。しかし、ある意味では「根無し草」こそが、自分のあるべき姿なのかもしれないと思っています。

心理学研究には様々な「軸」が存在します。大きいところでは、「理論」と「データ」、「実験研究」と「相関研究」、「基礎」と「応用」、といったものです。私はもともと、「理論」を重視し、「実験研究」を好み、「基礎」の解明を指向する人間でした。率直に言えば、「データ」は副次的な研究手段にすぎないし、「相関研究」は何も明らかにしないし、「応用」を考えることは真実の探求を妨げるのだとと思っていました。しかし、多様な研究に関わる中で、場合によっては、データから理論が生まれ、相関研究が実験研究の盲点を埋め、応用を考える中で明らかになる真実があるということに気づかされました。

おそらく、こうした軸の両端を高いレベルで融合することで研究の質は高まっていくのだらうと思います。その意味では、自分の研究のスタンスを軸のどこかに定めてしまうのではなく、状況に応じて軸の上を行ったり来たりできるような「根無し草」的柔軟さを持つことが大事なのかなと、最近考えるようになりました。

伊藤大幸 (Hiroyuki ITO) さん

【ご所属】 中部大学現代教育学部

【ご連絡先】 ito_hiroyuki@pd5.so-net.ne.jp

【ホームページ】 http://www006.upp.so-net.ne.jp/ito_h/

【その他】 内向的な人間なので、話しかけにくいオーラが出ているかもしれませんが、実のところシャイなだけですので、お気軽にお声がけください。